

八二年イスラエルのレバノン侵略から六月六日で侵略三周年を迎えた。三周年前までに“完全撤退”を公言したイスラエルは、六月一〇日現在、南レバノン軍（SLA）を戦力陣地として五〇〇名の軍事顧問を配置して居残り、レバノン人右翼によるイスラエルの“国境安全弁”的体制をつくりあげようとしている。レバノン政府は「これは完全撤退ではない。一兵残らず撤退せよ」と引

ニシアチブ”の共通ベースづくり。内矛盾の激化、第三に、米政府・ヨルダン・イスラエルを巡る“和平イ

八二年イスラエルのレバノン侵略の結果対峙抵抗を決意している。この攻防の局面を形成している。

五月二〇日、イスラエルは、パレスチナ側に捕虜になっていたイスラエル兵とひきかえに、岡本公三同志を含む千余人の政治犯の釈放に同意せざるをえなかつた。八二年の侵略の代価を六月六日までに何とか調整し、国内矛盾を緩和したいとするイスラエル側の思惑は、二年以上の交渉によるパレスチナ側の非妥協な要求を受け入れざるをえなかつた。イスラエルにとっての八二年侵略の代価の調整は、第二キャンプデービッド合意に向けた再編への道を野望するが故である。しかし、味方にとつての代価は何ら支払われていない。

八二年侵略以降、捕えられた多数の住民は、イスラエル内に移送された

1. 現在の局面

再編に向けた矛盾の激化

一九八五年六月一〇日

以上三つの動向がからみ合つて現在の攻防の局面を形成している。

五月二〇日、イスラエルは、パレスチナ側に捕虜になっていたイスラエル兵とひきかえに、岡本公三同志を含む千余人の政治犯の釈放に同意せざるをえなかつた。八二年の侵略の代価を六月六日までに何とか調整し、国内矛盾を緩和したいとするイスラエル側の思惑は、二年以上の交渉によるパレスチナ側の非妥協な要求を受け入れざるをえなかつた。イスラエルにとっての八二年侵略の代価の調整は、第二キャンプデービッド合意に向けた再編への道を野望するが故である。しかし、味方にとつての代価は何ら支払われていない。

八二年侵略以降、捕えられた多数の住民は、イスラエル内に移送された



第1号

発行 ウニタ書舗
東京都千代田区神田神保町1-52
TEL. (03)291-5533
編集 J.R.A.
郵便振替 東京1-48443
三菱銀行神保町支店 当座9012656
会員制 年会費20000円

まだし、SLAを陣地とするイスラエル占領支配は継続している。これらを無視し続ける限り、反米反イスラエル闘争はさらに非妥協におこし進められるだろう。今回の政治犯解放闘争に示されたように、またレバノン五・一七協定破棄に示されたように、非妥協な姿勢とその闘いのみが味方の対峙を可能とし、勝利の果実を実現しうる。

2. 右翼LF・SLAの動向とイスラエル

“六月一日以前のイスラエルの撤退”公表以後、右翼はさらに危機感を強めだ。イスラエルは“キャンプデービッド再開”に向けた自らの利害を貫いており、右翼の反乱に対し全面的にバックアップする立場になく、イスラエル北部安全に関してSLAを動員しているにすぎない。

- 1 -

“レバノンのキリスト教徒支援のためにイスラエル兵士を犠牲にするこそではない”とペレスが公言しているように、右翼のひき続く反乱はイスラエルの力なしには維持しえないのである。しかし、味方にとつぱかりか逆に自らの陣地を弱めるだけであり、キリスト教住民からの離反も増大してきた。

レバノン政府閣僚は“キリスト教

味方民族主義勢力内でも、これまでの権益を守ろうとする勢力、これまでの不平等な権益をより拡大しようとする勢力間の矛盾が不安定な状況を形成しておりその実力は武装力によって保証してきた。所属部族・宗教・団体の利害を捨てて、レバノン全体の利害に立つことによつてレバノンの安定はかちとられるのだが、その「レバノン全体の利益」はシリアの協力による上からの政府を媒介とした強制力を必要とする。政府を構成するのは各団体代表であるが、それらが各団体の利益を代表する限り、内閣自身の運営も行われずセキユリティープランの実行もはかれないで一年を過ぎた。

シリアは今年に入つて「各団体と共同によるレバノンの安定」を表明し、各勢力内の矛盾を解決するよう呼びかけてきた。この実行は、各団体を代表するリーダーたちが眞にアラブ・レバノン住民全体の利害に立つて、反米・反イスラエル戦線の対峙と国内経済再建をかなめとするセキュリティープランの実行をはかることを要求される。しかし、同時に内閣は、右翼代表も左派代表もキリ

スト教も回教も含まれている。右翼との対峙への介入の条件として、シリアルが示した二つの条件はこうした混乱を上からの民族主義政権の国家権力づくりとして進行する方向性を持つていた。それは右翼・イスラエルに対峙しつつ建国の責任を大きくなるわれるシーア派アマルの同調する動きであり、アミニの動搖を「右翼の反乱、カタイエブへの自己の足場のなさ」シリア・アマルの指導性の下にひきつけていこうとする方向として動き出していた。こうした上から人民武装の解除として右翼のみならず味方内にも矛盾と対立を形成していく結果となつた。

一方、パレスチナ勢力は、アラブ・アト・フセインのアンマン合意以降 P L O が米・エジプト・イスラエルのキャンプデービッドに運動し始めたことで、パレスチナ民族救済戦線（P N S F）の結成をはかり、反イスラエル・反米闘争の強化発展によって、アラファト路線の実行の阻止をめざしてきた。P N S F は、イスラエル撤退以降、展望されるキャンプデービッド再開を射程に入れ、シリアル・レバノン民族主義勢力との共同の強化による反アラファト路線の

五月七日、PNSFはそうした展望に基づいてレバノン勢力とパレスチナ勢力による合同勢力（ジョイントフォース）の形成とその指令部設置を申し入れたが拒否された。そして、逆にレバノン政府は、PNSFに対して南部からのパレスチナ勢力の攻撃の禁止を通告した。パレスチナ勢力は、"レバノンから出撃し闘う権利"を主張しており、そこで矛盾が大きく、明確になった。レバノン側は、八二年のイスラエル侵略に到るまでのパレスチナ側のあり方——自然発生的に権益を増大し、レバノンの法や住民を無視したあり方に強い不満を持っている。また、一旦イスラエルが侵略して以降、PLOの保存を第一として撤収を行ったことそして現在に到るまで、それらの教訓に基づいた闘いとなつていず、同様の"ジョイントフォース"の形成を求めてきている点に懸念を示し、レバノンの決定に従つた行動を求め無政府的に増大する独自領域の拡大に先制的な制限を通告したといえるだろう。レバノン南部は、レバノン南部住民の手で守るし、守れる、戦線の混乱をもたらすパレスチナ人の出撃は拒否するというものであった

また、セキュリティープランの実行上、キャンプ内の武装力の解除を要し始めた。

PNSFは共同して反米・反イスラエル闘争を闘いぬいてきたし、その戦略同盟を反アラファト路線としても強化すべき時に、パレスチナ人の排除は不当であるとする立場を持つていたであろう。

こうした矛盾を背景に、軍事的には全勢力武装下にあるレバノンでは挑発的行動や即時的な感情が対決戦線への拡大へと往々にして到る。また、アマルは、パレスチナキャンプ地一帯を統括しておりこれまでの長年の被抑圧下から一挙的に権益を拡大し、無政府的な排外主義的風潮を持つており、反イスラエルながらパレスチナ人に対して被害者意識は強い。

キャンプ内に武器を蓄積し、対峙をはかりパレスチナ人の権益を守ろうとする勢力の中で、主要にアマルとアラファット派の間の戦闘として軍事的衝突は始まった。四月にムラベトーンに対してアマルとの戦闘が始まつた時に、ムラベトーンを支持しているのでパレスチナ勢力にもアマルと対峙した余韻があつたであろうアマルの無差別な攻撃は、PNSF

三人の負傷者を数えた。アミン大統領は、シリアのアサド大統領と電話で交信しつつ、ジャジヤの挑発を押さえることを確認してしまった。内戦情況はさらに広がった。キリスト教リーダーたちは、戦闘停止を呼びかけ、フランジエ元大統領はアミンの辞任せを要求し、アミンが右翼民兵にさらに圧力をかけるよう迫った。

右翼ブンシール派のLFは、イスラエルの動きに呼応しつつ、同時に、イスラエルの後楯がレバノン右翼の国家分割に呼応したものでない以上、挑発的戦闘だけではやりきれなくなっている。内戦の劣勢を挽回すべく軍事対峙をはかりつつ、右翼側も政治的譲歩が避けられなくなってきた。

ヤジャに代る新しい代表のホベイカは、八二年、サブラ・シャティーラにおけるパレスチナ人虐殺の指揮者であり認められない。LFは新たに武器搬入までの時間がせぎとして人事交代をはかっているだけだ。LFとの合意・停戦は成り立たない。妥協は唯一、シリアのスポンサーによるクリスチヤン代表としてのアミンによってのみ考えられる。そして、これはまた、アミンの最後のチャンスである”と警告した。

任をひき受けると表明した。
中東における反米・反イスラエルの共同戦線形成としてレバノン安定化をめざすシリアは、レバノン内の矛盾をかつてのローランヌ合意を前提としておし進めることを望んでいる。それはまた、右翼に対峙する味方内の武装解除も意味しており、民兵軍団を国家権力へと再編しようとする過程で派生する矛盾をはらんでいる。右翼民兵は、戦闘緩和のため、各地から武装をひく」と一八日表明し、LFはジャズィーイン地区の軍事力の撤収、イスラエル内にあるLF連絡事務所の閉鎖を決定した」と表明し、イスラエルとの新たな戦略関係の再編を模索しつつ民族解放勢力内の矛盾（シーア派とパレスチナ勢力）

3. 味方内の矛盾・対立の激化

L F・S L A のやり方がキリスト教住民の利益とはならないことをはつきりと自覚し始めている。

3. 味方内の矛盾・対立の激化

右翼との軍事的対峙下で、味方の優勢が増大し戦線が安定し始めた頃、突然”という感じでキャンプ内のパレスチナ勢力とシーア派アマルの軍事衝突が始まった。しかし、これは”突然”引き起こされたことではなく、レバノン安定に向かって建国を進める以上、予測された事態であった。五・一七協定破棄に始まる建国の闘いは、セキュリティープランの実施にあり、主要に、その実行を右翼が拒み、キリスト教社会内の”グーデター”によつて、独立王国

（エジプトは経済的にも、イスラエルにつけられた）親米派として印象づけた。エジ
プトは経済的にも、イスラエルにつけられた。エジ
プトは経済的にも、イスラエルにつけられた。
ぐ米国からの借かんを増大させてお
り、訪米時のムバラク提案によつて
欧洲・ヨルダンなどと共同しつつ米
国政府への交渉をくり返してきた。
こうした継承を経て、マーフィー
の訪中東後、シュルツは、ウイーン
でグロムイコ・ソ連外相と会う前の
五月九日から四日間、ヨルダン・イ
スラエル・エジプトを訪れた。そし
て、イスラエル・アラブの交渉に向
けて、五月のフェイン・レーガン会
談で話合うだろう。パレスチナ人代
表権問題でのむずかしさはある。フ
セイン・ニシアチズは、失敗すると
見るむきもあるが、展望があり、ま
た、チャンスもある。ヨルダン・パ
レスチナ代表団に関して、アンマン
合意による積極的側面があり、イス
ラエルの占領地からの撤退と交換に
直接和平交渉を行うという共通認識
もある。イスラエルの立場は、一二
日、ペレスが示したように PLO 憲
章を支持する個人とは交渉しないと
いう立場である」と語っている。そ
の後、レバノンにおけるシーア派ア
マルとパレスチナ勢力の対立矛盾の
激化する頃、フセインは、二二日、
ムバラクとの会見、英・サッチャー

首相との会見を経て、ムバラクの提案を継承しつつ、二九日訪米し、レーガンとの会談を行った。それによると、レーガン政権は、八五年末までに中東問題のメドをつげたい意向だが、あくまでも当事国との直接交渉方式を主張している。そして直接対話方式である以上、ヨルダン単独か、ヨルダン・パレスチナ合同代表団かは二義的な問題とみており、ソ連参加の国際会議方式を拒否することを鮮明に示した。

米は、フセインの中東和平国際會議提案をうけて、国務省声明として五月三〇日、ソ連が中東で“建設的な役割”を果たそうとする意欲を示すまで、ソ連の参加に反対すると立場を表明した。“建設的役割”とは①対イスラエル外交関係の完全回復②反ユダヤ宣伝中止、③ソ連内ユダヤ人に対する移住権を含む処置改善④ソ連圏諸国からの対イラン武器供与の縮小にむけての影響力の行使、⑤レバノン内民兵へのソ連製武器供与中止、⑥同地域の和平枠組みづくりの動きの邪魔をしないこと、という点は、①PLOを合同代表団に加えう米政府見解を示した。

フセインとレーガンの話合いの結果報道されたところによると、相違

る問題。ヨルダン外相によると、六月中に米とヨルダン・パレスチナ代表による予備会議が行われるが、PLOのあつかいはその時にも話されるものようである。(2)国際会議を主張してきたフセインに対し、直接対話方式をレーガンは主張した。(3)国連決議二四二・三三八承認声明のみならず、アラファトがイスラエル承認を声明することを米側は主張したといわれている。その意味で、レーガン・フセイン会談は最終合意に達したとはいえないなかった。

その後、シュルツはレーガン・フセイン会見について、イスラエルのラビンに書簡を送った。イスラエル閣議に公表された主旨によると、(1)対イスラエル交渉開始の準備があること。(2)五年内の交渉をヨルダンは希望している、(3)交渉は合同代表团方式(ヨルダン単独ではない)、(4)交渉の難点となるパレスチナ建国問題は論議せず、国連決議二四二・三三八を土台とすること。返還後のヨルダン川西岸・ガザ地区の運営形態はパレスチナ独立国家でなくヨルダント・パレスチナ連邦国家となり、このフセイン案は、アラファトおよびPLO執行委の了解のもとにある、

パレスチナ合同代表団と開始するが
入ることは認めない、⑤米国の指名
した予備会談に出席するパレスチナ
側代表は七人（うち四名が公表され
ている。エリアス・フレイジー・ベツ
レハム市長、ラシド・アル・シャワ
ー元ガザ市長、シェーハ・アブダル
ハミドアルサイヤム、ビクトリア・
アル・マスリーナブロスの実業家・
元ヨルダン議會議長）
このシユルツ書簡に対し、パレス
チナ代表に PLO を入れない事を条
件として労働党は支持し、リクード
側もまた支持を表明した。そしてフセ
イン訪米時、F20 を含む最新銃兵器
をヨルダンに売却することを決定し
た事項に對して反対を表明した。
フセイン訪米を終えて、『和平』
イニシアチブの実践体制は整ったこ
とを米国政府は宣伝している。果た
してそうか？ かつてイスラエルが
村落同盟をパレスチナ人の間につく
り、PLO にかわって自治交渉の玉
に仕立てあげようとしたように、イス
ラエル・米の思惑は、イスラエル
の安定と安全・反共中東陣型の形成
にある。そしてその陣型にエジプト
・ヨルダンを合流させながら、反帝
勢力に對峙する帝国主義の足場づく

を含む全パレスチナ勢力の怒りを誘い、五月二〇日に始まつた軍事衝突は絶望的に拡大し続けた。二〇日から二六日の一週間で、死者三六八人負傷者一七〇〇人に達した。

味方内の対決は、相互の積極面を見えなくさせ、マイナス面を増大させる。P.N.S.F.はシリアへの介入を要請し、アマルの横暴に対処するよう訴えた。シリアは、五月三〇日、アミンをダマスカスに呼んで、再びニユーセキュリティープランの実行をめざし、同時にアマルと進歩社会主義者党(=P.S.P.)のレバノン勢力との調整をはかった。六月一日、アマルとP.S.P.の提案する停戦案がパレスチナ・シリア側に示され停戦合意が成立した。その内容は①即時攻撃停止、②負傷者の救出、治療・食料・水の供給のため両者が道を開ける、③今後は現状を維持し西ベイルートをレバノン軍・アマル・ドルーズ・ADF軍の統合部隊によるパトロールを行う。キャンプ地はパレスチナ部隊によるパトロールを行う。以上の合意の下に、赤十字がキャンプ内に入り負傷者の救出をはかつた。一時的な措置として停戦がはかられが矛盾・対立は解決していない。

また、シリアに対し、アミン大統

領は①シリアの協力によって合同軍による西ベイルート・シューフ(ドルーズ地区)サイダでの各派の武装解除、②東側はレバノン軍による保安維持と武装解除、③パレスチナ人部隊の武装解除をカイロ協定に沿つて行う、という提案を行つたが、シリアは、①停戦の即時実践賛成、アマル・ドルーズ提案を支持する、②西ベイルート・山岳部のみのレバノン・シリア合同軍の展開は成立しない。やるなら東ベイルート・右翼地区も含めて行うべき、③レバノン統一再建は各派の合意に基づいて行るべき、という立場に立ち、アミンのカタイエブ寄りの提案に合意しなかつたといわれている。

アマルとパレスチナ勢力の衝突はキャンプ住民の多大な犠牲をもたらし、同時に、シリア・レバノン・パレスチナの反帝反米の戦略的な同盟関係を即時のな憤激の前で軽視する傾向を生み出している。パレスチナ・レバノン住民に依拠し、住民同士の共感を組織し、各々の指導勢力が条件と場に合った指導性を發揮し、妥結点をつくり出していかなければならない時である。

認める"と表明し、交渉の場の中でPLOの権利の回復をはかるうとしている。米政府は"アラファトのコメントは、そのことによって中東和平の重要な前進をもたらすとはいえない" "イスラエル承認と二四二決議をPLO全体の執行委員会で認めれば会う用意がある。現在もレーがン案が最高の提案である"とアラファト発言にコメントした。アブイヤドは"建国ぬきの連邦政府反対、PNC決議に反したPLOの動きに反対する。ヨルダンとの連邦はパレスチナ国家建設の交渉の後の問題である"と一三日のシユルツ・ペレスの会見声明後に表明している。

敵は、イスラエルをかなめに、その利益に沿つてアラブ側との妥協点を調整しており、エジプトはサダト路線によつて敷かれたキャンプデービッド合意をそのまま生かして、アラブへのよりベターな条件を求める方向へと模索している。(キャンプデービッド合意の破棄に基づくPLOを含む中東和平国際会議の道をムバラク政権がはつきりと閉じ"ムバラク提案"によるレーガン案とのブリッジを示したことはアラブ世界におけるムバラク各派の立場をはつきり

4. “和平”イニシアチブ マーフィー米特使による中

を含む全パレスチナ勢力の怒りを誘い、五月二〇日に始まつた軍事衝突は絶望的に拡大し続けた。二〇日から二六日の一週間で、死者三六八人負傷者一七〇人に達した。

領は①シリアの協力によつて合同軍による西ベイルート・シユーフ（ドルーズ地区）サイダでの各派の武装解除、②東側はレバノン軍による保安維持と武装解除、③パレスチナ人部隊の武装解除をカイロ協定に沿つ

“和平”イニシアチブ
マーフィー米特使による中東イニシアチブをめぐる調査活動、ボンサミットを経て、米・イスラエルの“和平イニシアチブづくり”的戦術は固まつたようみえる。五月一二日、

るなら、PLOは国連二四二決議を認める"と表明し、交渉の場の中でPLOの権利の回復をはかるうとしている。米政府は"アラファトのコメントは、そのことによって中東和平の重要な前進をもたらすとはいえる

で焦点にならないアラブ諸国に革命争よりも外交展開を重点にしている P L O 統一原則に打撃を与え、P L O の諸問題題自分勝手に処理した。パレスチナ国民会議（P N C）の諸決議違反をやり続けている。パレスチナ国民基金の財源を誤用・濫用している。エジプト政府がキャンプデービッド合意にまだ責任を持つているにもかかわらず、アラファトはカイロを訪問し、ホスニ・ムバラクと会った。その訪問・会談のおかげでエジプト政府は、アラブ・イスラム世界で孤立していたのが返りざく糸口をつかんだ。アラファトは、ヨルダン政府政策と実際にうまく歩調を合わせて動いている。一九八四年一一月には非合法な P N C をアンマンで開催した。今年二月一日にはヨルダンのフェセイン王と合意に調印しさえした。この投降主義的取り引きは米国のパレスチナ問題抹殺計画にパレスチナ右翼が直接加担していることを物語っている。パレスチナ民族の大義をおびやかしている。これはパレスチナ右翼がパレスチナ人民を P L O が代表する権利を放棄したことになる。

主義路線が民族の大義に対する質的な脅威を与えていたことを明らかにした。この路線は、PNC歴代会議の諸決議・パレスチナ人民の意志に沿ったものである。この路線の危険性は、反動・投降主義陣地に、そしてキャンプデービッド合意・レバーガンプランにPLOをひきずり込むことにある。だからこそ、この逸脱路線、その提唱者どもは、パレスチナ人民に対する主要な脅威なのである。この路線は、革命を内部から危うくするものである。この路線は革命の政治路線・民族主義的綱領の正しさ、革命の成果をおびやかしている。

この間の発展をみてみると、逸脱派指導部の過去の展開が単なる実験的戦術や誤ちというものではなかったことが明白だ。すべてが一貫したものであって、パレスチナ問題そのものの抹殺的解決をもくろむたのである。だから、この路線展開により、問題の指導部はパレスチナ大衆の眞利益と目的に矛盾する立場に立つたのである。そうすることによつて

一方こうした米・イスラエルの指導性による交渉の場の形成は、現状のレバノン内の味方の矛盾をより中東全体の戦略的視野に立った闘いの再構成へと積極的に転換せざるを得ないだろう。内部矛盾の根拠を逆に団結の根拠とする弁証法的な展開によって、反米・反イスラエル戦の強化を媒介に、この矛盾を突破し領導する勢力の登場が問われている。アマルなどパレスチナの戦闘は、戦略的に反帝反米闘争を闘いぬく目的意識をもつかぎり、世界の反帝勢力・シリア・革命勢力の支援によって、イスラエル戦の強化もまた問われる

- ・近代パレスチナ革命の闘いで、大きな成果をあげた。次にそれらの成果をみてみよう。
- ・パレスチナの大義抹殺のすべての策動をはねのけ、この大義を掲げていること。
- ・パレスチナ人民を一つの民族的单一体として再統一していること。
- ・パレスチナ解放機構（PLO）の枠組の中にパレスチナ人民の戦闘的、独自のアイデンティティを確立したこと。
- ・PLOをパレスチナ人民の唯一合法の代表として、アラブおよび国際的承認をかちとったこと。
- ・以上の成果は、あらゆる闘争手段第一に武装闘争だが、をもってかちとつたものである。これらの成果を

わち祖国への帰還、自決権行使、パレスチナ建国を獲得するための最も有効な武器である。

ところが、PLOが内的、外的危機にさらされている。これらが民族の大義をおびやかしている。パレスチナ人民をPLOが代表する権利、PLOの独自性、反帝国主義、反シオニズム、反反動、反投降の民族綱領、これらが危機に直面しているのだ。

エジプトがサダトの政策の結果、アラブーシオニスト紛争から戦列脱落した。エジプト政府はキャンプデービッド合意、エジプトイスラエル（和平）条約に調印した。この事実によって、帝国主義とシオニズムは、アラブ也哉で文勢強ひつゝ、

まり、この抹殺策動を受けて立つ民族主義路線からPLOを転換させようというねらいである。奴らは、PLOの分裂・抹殺そしてPLOの統轄、これをねらっている。

これらの現実に立って、PLOは危機に直面していかねばならない。ところが右派指導部が政治・軍事・組織運営・財政問題で路線逸脱の誤った行為を続け、危機を悪化させている。この指導部は、米国のパレスチナ問題抹殺計画と公然と取り引きを開始した。たとえば、「レーガン・プランには積極面もある」と主張し、エジプト政権との接触を続けていた。そして、アラブ・国際レベルでの同盟関係を変化させた。著名なシオニスト人士との会談を続けていき。シオニストによる「はは、ペレス

りを経済的・軍事的支援によって貫徹しようとしている。このお繕立てに P L O が一歩一歩足を踏みいれるることは、ヨルダンの直接交渉に正当性を与え、アラブ全体の反イスラエルの対峙をきりくずす責任を大きく負うことになるだろう。アンマン合意を出発点とする交渉は混乱と、自らの逆戻りを仄めかすが如きは、さういふ意味で、アラブ諸国が何よりも心配する事態である。

パレスチナ民族救済 戦線綱領

スチナ民族救済
戦線綱領

P L O は、民族的目標達成のためのパレスチナ人民の闘争の意志と統一を表現しているものだ。従つて、P L O は、パレスチナ問題を抹殺しようとしたり、パレスチナ民族解放運動を投降させようとしたりするすべての策動・陰謀に対する最も重要な砦であった。パレスチナ人民にとっては、自らの民族的權利を、一々

レバノン侵略はこの攻勢の頂点であった。この攻勢を受けパレスチナ革命は、レバノン南部とベイルートから余儀なく撤退した。こうしてパレスチナ革命は困難な客観的・主体的因素（内的）条件に直面することになつた。帝国主義・シオニスト・反動の陰謀は強化され、パレスチナ人民の民族的義理をそよがわせていった。

8. 南部レバノンでのシオニストの占領に対し、レバノン民族民主戦線、アマル運動と共に武装闘争を強化して闘う。レバノンの主権・統一・民主的発展・アラブ的性格の回復をめざして闘う彼らを支援する。以下を保証すべく彼らと共働する。

(a) 在レバノン・パレスチナ大衆とキャンプの保安。

(b) シアレスチナ人民の社会的利益と市民的権利。

(c) 政治活動を組織し展開すること、パレスチナ革命の隊列に参加すること。これらの権利をパレスチナ人民が持つこと。

(d) わが戦線と指導部を通じたPLO諸機関の事業。

9. エジプト民族主義勢力との関係強化。エジプト政権に対する共同闘争継続。PNCおよびバグダッド決議にのっとり、キャンプデービッド合意を倒すまでエジプト政権を包囲・孤立化する。

10. 逸脱路線提唱者とシオニスト勢力・人士間の秘密・公然の接触と断固として闘う。何故なら、そうした接触は、わが民族的権利を脅かすからである。

11. 中東において、帝国主義・シオ

◎組織的粹組

- パレスチナ民族救済戦線は暫定的な枠組である。その任務は反帝・反シオニズム・反反動・反投降主義に対決した P L O の民族路線の復活にある。また、革命の継承性を保証するため、逸脱路線、ま

「ハレアカラ民族救済戦線参加組織」

人民闘争戦線	サミール・ゴー ・ジブリル	ファタハ整風派	アブ・ムサ派
人民戦線総司令部	アハメド	アブ・ムサ派	アハメド

のためキャンプ入りするのを阻止してもいる。PFLPは、侵略攻撃をだんがいすると共に、レバノン情勢を複雑にしようとするアマル内の疑わしき部分に対して、警告する。パレスチナ救国戦線がレバノン民

政治局声明

キャンプ戦争における PFLPの声明

旧民主連合派

パレスチナ解放戦線 タラト・
ヤクウーブ サイカ イサム・アル・カドリ

ブ反動のすべてのもくろみに対し
て共同して闘う。

わけキャンプデービッド合意とレーガンプランに対して共同して闘う。アラファートとフセインが調印したアラブ・イスラエル合意に対する、アラブ連邦

建国、それら権利の回復ができるよう、シリアとの戦略的同盟を強化する。被占領全アラブ領の解放ができるようシリアとの戦略的同盟を強化する。シオニストの侵略・略奪政策に対して、米国・オニストの支配権獲得企図とし

チナの権利、たがいなく祖国への帰還権、自決権、パレスチナ人の唯一合法の代表たる PLO の指導下に独立したパレスチナ国

合意の代表たる ILO の権利を棄することを意味し、それが奴隸の目的である。

スチナそしてアラブの権利とひきかえにアラブ・シオニスト紛争が結着をつけ、パレスチナ人の唯一

6. タン政府の反動的政策および、その手先に對して闘う。

アマル、* レバノン軍第六旅団はパレスチナ民族の抵抗にあって、キャンプ制圧に失敗したので、レバノン軍指導部はヤルゼにおいて、アマルおよび第六旅団援軍のために必要な準備と、第六旅団に対し二日分の軍備・補給給与を開始。

今朝、第六旅団は、火炎放射器部隊、トラック、12MMのマシンガン補給をうけた。また、東ベイルートを通っていく特別な道を第六旅団のために開けた。

ホ、世界中のパレスチナ人へのアピール…議長

この六日間、ベイルートの三つのキャンプが攻撃にもちこたえている攻撃をしかけているのは、アマル、レバノン軍の第六、第八部隊でありキャンプのコントロール、武装解除を狙っている。

ヘ、ベイルート・キャンプ内のパレスチナ人へのメッセージ…議長

ト、被占領地内ヨルダンのパレスチナ人へのメッセージ…議長 虐殺だんがいの抗議行動を全ての手段で展開せよ。

「キャンプから手を引け。シオニストがレバノン侵略で狙いつつやりきれなかつた事を八五年の夏にやるぬこうとする大量虐殺を止めろ」

*第六旅団 八四年二月の西ベイルート蜂起時、アマルに合流した。

(元来、シーア教徒が多い)現在西ベイルートの治安維持の任務を負っている。なお、東ベイルートは第八旅団配属。現在の国防大臣は、元第八旅団長のアウン将軍である。

チ、アラブ民族主義的、進歩的諸大統領へのアピール…議長 ベイルートのパレスチナ人虐殺を止めさせるよう、さらに努力されたし。この虐殺の目的は、レバノンにおけるパレスチナ人の民族的役割の抹殺にあり。

二、軍事声明・軍事スポーツマ
ソムを利するのみ。
決へむけ、即時に働きかけてほしい
戦闘再発防止、停戦へむけた政治解
そして、世界中の人间的諸組織が、
一戦線を形成されるよう、訴える。

不退転の決意と犠牲に対し、あいさつしたい。パレスチナ人のレバノンにおける民族的存在抹殺策動に対し、自分もこう言う、『生命を失う事も甘受する。勝利であろうと敗北であろうと、我々は、決して、自ら武装解除しない』

アマルの要求には、どんな事があるても応じられない。
これまであなた方がやってきた事よりもっとやつてほしいと要求する権利を我々はもっている。このネオファシスト共の虐殺強化の決意がますます昂じているから。

きた。今朝から、パレスチナアルベック地区においては、アルは挑発強化、アル・ジャリルはキャンプ封鎖強化をかけてきた。
③三キャンプ（ベイルート）に対するアマル、第六、第八旅団の破壊的な攻撃を止めさせる努力が進展。このうち、ペレス

アマルの要求には、どんな事があるても応じられない。
これまであなた方がやってきた事よりもっとやつてほしいと要求する権利を我々はもっている。このネオファシスト共の虐殺強化の決意がますます昂じているから。

きた。今朝から、パレスチナアルベック地区においては、アルは挑発強化、アル・ジャリルはキャンプ封鎖強化をかけてきた。
③三キャンプ（ベイルート）に対するアマル、第六、第八旅団の破壊的な攻撃を止めさせる努力が進展。このうち、ペレス

1985年9月30日 第1号 月刊 中東レポート

入し、侵略を止めさせてほしい。

よび追随者共の決定にあり、「救国戦線が、パレスチナ鬪争の歴史にふさわしいような仕方で、レバノンにおけるパレスチナ革命が民族的役割を新たに果たしていくべく、八二年以前、レバノンでどの様な役割を果たしてきたのかを総括し、あくまで逸脱路線（訳注・アラファト路線）と対決していくこうとしているのに、このパレスチナ革命が果たすべき民族的役割に敵対して、攻撃がかけられている」

どうすべきかについて

(1) パレスチナ人民の大義抹殺へつながる逸脱路線に対決する事に全力傾注

(2) 敵に対し共同鬪争をくむのに有用な兄弟的関係を立脚し、反

一に被占領地、レバノン、シリ
ア、そして、どこの国にいよう
とも有効でなければならない。
「キャンプにいる我らがパレスチ
ナ人民から手をひけ、戦闘をしかけ
るのを止めよ、レバノン、シリア、
パレスチナの大義を脅かすものと対
決すべく隊伍を整える事ができるよ
う、停戦を侮蔑し続ける事を止めよ
う」という事につづけて

一に被占領地、レバノン、シリ
ア、そして、どこの国にいよう
とも有効でなければならない。
「キャンプにいる我らがパレスチ
ナ人民から手をひけ、戦闘をしかけ
るのを止めよ、レバノン、シリア、
パレスチナの大義を脅かすものと対
決すべく隊伍を整える事ができるよ
う、停戦を侮蔑し続ける事を止めよ
う」という事につづけて

口、パレス・オフィス声明
ダマスカス赤十字委員会本部前
でパレスチナ人、アラブ人婦人三〇
〇名が（抗議の）すわりこみ中。
あらゆる国際的人道的諸組織に対
し、医療品をカンパすること、そし
て、ベイルートのパレスチナキャン
プへの飲料水補給を行うよう圧力を
かける事をアピールしている。全て
の国際諸組織がキャンプ包围に入
して止めさせるよう、アピール。
ハ、クリーヴランド（米・オハイオ
州）パレスチナ委員会から議長への
メッセージ
パレスチナ人民への攻撃は、だん
がいする。あなた方全員が私たちの
共通の敵ノナニズムに付して聞うた

主戦線に伴われて行つた(レバノン政府との交渉)パレスチナーレバノン関係提案に対する回答を出す代りに、アマル内の疑わしき部分は、キャンプ統轄を侵略によって行つている。

八五年五月サブラ・シャティーラ
虐殺問題

「現在レバノンでおこっている戦闘は、個人的な衝突が突然的に拡大したとか、アラファートのしわざとか、過去と同じような力をパレスチナ武装勢力がベイルートに構築したとか、とり沙汰されているが、これらは誤ち」

「根本問題は、レバノンにおけるパレスチナ人の武装した役割を完全

(4) この三者同盟内関係強化

(3) この基準は、アラブ民族史の政治転換点であるシリアーレバノン一パレスチナ民族同盟が、任務を果たすよう、さらに強化する。

シオニズム・反帝勢力間の矛盾を解決する。

三キャンプでの殺人、破壊、新たに虐殺に責任を負うナビーハ・ベリが、がんとして調停に応じないのは、アマル、またその追随者共が何と言ひぬけようとしても、眞の狙いを暴露している。それは、レバノンにおけるパレスチナ人の民族的役割を抹消する事。

PFLPは、決して投降せず、あらゆる力を動員して、抵抗する。

昨晩の、そして今朝のアマル、レ

リビア、アルジェリア、民主イエメンは、パレスチナ人の武装民族闘争支持の立場に立った。こうして、この三国は正しい民族的立場を体現した。

全世界の進歩的、平和的諸勢力のみさん、パレスチナ人民の立場を擁護されたし。レバノン、シリアの全勢力よ、敵の策動に対し隊伍を整えねばならないのに、帝国主義、シオニストを利するだけにしかならないこの戦争を終結させよ。

八五年六月一日
ベイルート記者会見

アマル停戦・声明

1. ナビーハ・ベリカ（アマル政治局員）

アサド大統領要請を受け、アマル政治局は戦闘停止を決定した。

これは、この危機解決に努力中の（レバノン）民族指導部と協働してシリアが包括的解決を作るチャレンスを与えるためである。

シリアと民族指導部の同盟は、永続的なものである。シリア以外にレ

アマル停戦の声明

ベイルート記者会見

アサド大統領要請を受け、アマル
政治局は戦闘停止を決定した。

ハノンのセキニリティを作れる主体は存在しない。シリアのみがレバノンの全党派、パレスチナ・キャンプ、レバノン全体のセキュリティを維持する能力をもっている。全ての人道的諸組織よ、負傷者の手当のために戦闘医へ入って援助されたし。

国連安保理は、当事国の要請なくおまけに国連安保理の立場に反対する当事国の意見を無視して開催された。これは遺憾である。国連安保理開催によつて、イスラエルは南部のかわりに北部に国連軍配備をかちとらんとするもろみを進めた。またフランス社会党は、シオニズムひいきであることを暴露、こうした立場は、アラファトー・アンマン同盟が吹聴する「和平」過程の広がりをかくすものだ。

レバノン人民の抵抗戦は、こうした敵の策動にまどわされることなくレバノンの領土からラ・ハドの雇われ者、手先を叩き出すまで続ける事をはつきりさせておこう。南部の闘う人民の皆さん、あなたがたの英雄的闘いを賞讃せずにはいられない。ベイルートの陰謀は、アマル、南部レバノンに敵対して狙いうちしたものである。進歩社会党（PSP）との関係は、確固としたものであり、戦

ベイルート記者会見

アマルは五月三日に発表した停戦を守る。アマルとパレスチナ人は共通の目的と将来を分かっていることを強調したい。アマル、パレスチナ、レバノン、そしてアラブの間に何の分離も存在しない。

この間戦闘が激化したのは、パレスチナ、アマル、シリアに紛争をかまそうとうともくろみによる。この陰謀をやるよう命ぜられたのがヤセル・アラファトだ。シリア軍とレバノン軍が全党派、全拠点の武器収任務を共働するのを歓迎する。我が重火器を入手したのも、イスラエルと対決するためであつたし、パレスチナ人に対しても向けるつもりはなかった。アラファトはレバノン内外でのアマルのイメージを歪曲しているが、これは許せぬことだ。(シリリアンタイムス、八五年六月二日)

『アミン・アサド会談の予測』新しい政治情勢を迎えてファランジ党党首は語る（抄訳）
マンデーモーニング
八五年六月三日～六月九日

1. 宗教的装いによる各政党の闘い

戦争の現実をみれば、宗派のイデオロギーと政党のそれは異なるといふ事が今日、明らかになってきた。

しかし、我がファランジ党は国民党である事は歴史が証明している。そもそも、戦争（訳注：五〇年代、七〇年代の内戦をさすだろう）が始まつたのも、ファランジ党がレバノンにおけるパレスチナ武装力に反対したこと、レバノン国家内にレバノン国権の及ばないパレスチナ国家の存在に反対したことによる。残念ながら、こうしたファランジ党的立場は、宗教的な動機によるものと誤解されてきた。それでも、戦争の過程で予想は変化したが。

何れにせよ、一つだけ、はつきりしている。あれこれの宗派に属する人々が、宗派の数だけ国民・国家に

パレスチナ人は全員、アマルとレバノン軍に武器を渡すことなく、侵略に対し断固闘う。今や、合同司令部を作り、一糸乱れぬ指揮で闘っている。

口、政治局アピール

世界中の人道的組織は、あらゆる手段を構じて、キャンプに対する食糧、水、医療品補給を行えるよう、介入されたし。

ハ、軍事声明

ボルジ・バラージナキャンプからの赤十字負傷者輸送隊が、空港道路でアマルの部隊に止められた。交渉の後、通過許可された。

アマルは、合意の第二段階実行はアマルの三人の捕虜釈放と交換した

努力の可能性をも検討するだろう。

同上・軍事声明

昨夜および今朝の軍事情勢

(1) 昨夜、パレスチナ戦士部隊は、シャティーラ近くのアマアワ・アルアジャザ拠点を急襲し、第六旅団一〇名、敵兵一五名をせん滅。

(2) 今朝、パレスチナ革命側は、アマル、レバノン軍に反撃。アマアワ、アルアジャザ拠点を完全に解放し、さらに敵の拠点にむけ進撃中。

(3) アル・ドハイ／シャティーラ区では激戦中。機関銃、砲撃戦中方の防衛線構築に至り、新しい

(4) サブラ、シャティーラでは、味

同上。軍事聲明

PFLP政治局スパークスマントー明
アマルとレバノン軍は大きな被害をうけたので、志氣低下中。そしてこの陰謀的内ゲバにかりたてだアマルリーダーたちの指揮を拒否して戦線離脱者が始めている。

今、アマル内に分解（民族主義者と疑わしき分子）が始まっている。多数の軍事カードルを含む多くのアマルメンバーが処刑されている。アマルは、レバノンの全民族主義者を対キャンプ戦にむけ、ベイルートの南部郊外に結集させようとしている。これに反対する多くの正直なレバノン民族主義者を投獄している。

レバノン政府がアマルの背後から
かけてくるこの暴力的、パレスチナ
抹殺主義的攻撃の継続に対し、我々
は自らの武装した民族闘争防衛に決
起し、最後まで抵抗する事を明らか
にしておこう。あらゆる代価、あら
ゆる犠牲をものともせず、我々は全
てのキャンプにおいて武装した民族
的な力を守る。

レバノン民族運動の兄弟たち、こ
の陰謀に対してもう一回、アマルの
隊列に参加せよ。アマルの将兵諸
君、民族勢力の立場に立ち、この陰
謀をおし進めんとする命令を拒否せ
ぬ

しかし、我々はアマル、レバノン軍第六、第八旅団に、キャンプの制圧権を渡していない。奴らは、キャンプの家々をこわし、焼き、ブルドーザーでこわしている。

五月二八日

(5) 戦闘方法に出た。これで、さらに断固として闘えるようになつた。

議長

PFLP議長声明(アルジェから)
キャンプに対する侵略的攻撃は、
これで一二日めに入った。という事
は、アマルに対しシリアがOKを出

持つてきたヴァチカンと我々との關係をその代償にするという事ではなく。この不一致は、今や、党の方がレバノンの政治的現実にみあう予測を立てていたという事を問わず語りに明らかにするものになっている。レバノンの将来を展望する点において、現在不一致は克服されたと言う事ができる。この不一致が問題の根源、戦争の理由であったとはみなしていい。第一、党の政治路線に反対して叛乱に参加した多くの人々は党が創立期から組織としての展開期へと発展していく時代に党の評議会、その他の党活動に参加したからである。この過程は、困難ではあるが、何よりも必要な建党の過程であって、個

5. 叛乱派の政治主張「独自の政治的決定」という問題

であり、しかも、レバノンという国、そしてレバノン人のより高度な利益を条件に入れねばならぬということになる。ファランジ党の立場は、上述のものであり、他の人々も同じようなものではないだろうか？ 我は、自分たちを誰にも、何物にも左右されないとみなすだけの理由で、他の考え方をとろうとは思わない。四三年来、党の政策は一貫していた。レバノン共和国大統領を支持するということだ。だが、このために、代価を支払わねばならなかつた。長い闘いの後に、この政策のみがレバノン、そしてレバノンのクリスチヤンを救うものであるという事が明らかになつた。もっとありていに言うな

一の大義に有効なら、我々はこれを鼓舞するだろう。レバニーズ・フォーシーズの一員として、この連立勢力内部、または他勢力との間にどんな不一致もないよう願っている。
が、現在に至るまで、どうもこの連立勢力がどういう政治過程を展望しているのか、つかみにくい。国民党としているのか、つかみにくい。国民党としては、レバノン開拓やく来る転換点にある我々の現状を克服しうるものとして、双手をあげて支持するだろう。

- 15 -

ファランジ党のめざすレバノンとは、自由、人間性、尊厳の国だ。國家宗教をもたず、内部における価値の多様性を許容するような国。ファンジ党は、全宗派がレバノン国家概念で我々と一致する国がきてほしいと考えている。ファンジ党にはクリスチヤンでない人も参加している。タクシーチヤンか否かでなしに、党として、七五年にレバノン国家建国闘争を展開し、現在もこの目的にむかって闘っている。我々は、党的目標を堅持してきたし、これからもそうするだろう。この信念は宗教とは異なる次元のものであつたし、これからもそうであろう。まあ、クリスチヤンの感情をよく表現しているという特性があるにはあるが。

2. 八五年九月にファンジ党再編の予定

レバノンの民主的、社会的な一政党としてのファンジ党解散など、そのままで、再編を九月に行いたいと考えている。現在の党的基本部分をどうこうするというのではなく、

八五年九月にフアランジ党再編の予定

3. 一九四三年の国民合意方式の今
　　目的妥当性と問題点

　　昨年亡くなつた我が建党リーダーのシェーハ・ピエールは四三年方式について実によく語つたものだ。彼は、これが共存の哲学だと理解していたからだ。我々も、また、この点では同じ信念を今日も持つてゐる。

　　亡くなつたりした分、組織、体制、人材配置が現在の情勢に耐えうるものなか否かを検討して、再編していくこうとしている。我が党的国民的諸原則は変化ないも、戦争情況は考慮せねばならない。新しい国民的政治理綱領を作らねばならない。何故なら、我々は六〇年代の党大会で採択されたものに従つて実践しているが時代は既に八五年であつて、時代に合つたものが必要。だから、教育、経済開発、社会的、経済分野において、この一〇年内の戦争の後の現状将来に耐えうる国民綱領を作るのは当然であろう。

一九四三年の国民合意方式の今 日的妥当性と問題点

は不変でも、他の全ての事物が変化するのと同じで、この方式も過去四〇年間、とくに過去一〇年間の戦争の過程で生じた変化に合うよう、今日的要件にみあうように近代化が必要になつてはきている。

由から、大変不安に喰
だから、方式をどうや
よ、クリスチャンを安
目的にすべきだろう。

4. ファランジ党にそ
ンジ党ミリシア
フォーシズの主な
上党的関係の現状

たために一定の物事の法則、現状に矛盾する決定を下す事を「独自の政治的決定」と言うのだろうか？現在、力の均衡、ある関係性や問題と全く無関係に、完全なる独自の政治的決まりなるものを下せる国は、今日の世界には一つとして存在しない。だから、完全に独自の政治的決定などというものは存在しないという事を考慮しておかねばならないのだ。

とすれば、我々の政治的決定が独自であるのは、ある圧力、ある人々の影響をうけないという限りにおいてであり、しかも、レバノンという国、そしてレバノン人のより高度な利益を条件に入れねばならぬという事になる。ファランジ党の立場は、上述のものであり、他の人々も同じようなものではないだろうか？

私は、自分たちを誰にも、何物にも左右されないとみなすだけの理由で、他の考え方をとろうとは思わない。

四三年來、党の政策は一貫していた。レバノン共和国大統領を支持すると、長い闘いの後に、この政策のみがレバノン、そしてレバノンのクリスチヤンを救うものであるという事が明らかになつた。もっとありていに言うなら、クリスチヤンの存在、レバノンの特異な構造を救うのは、大統領を支持するという事による。独自の政治的決定というテーマは、世論を左右するストーガン以上のものではありえても、目標たりえない。

6. C C U L (統一レバノンのためのクリスチヤン同盟)に対する態度

我々は、短期、長期のクリスチヤンの統一を呼びかける事を支持する。だから、C C U L のメンバーと党は会つたりもした。もしC C U L が統一大義に有効なら、我々はこれを鼓舞するだろう。レバニーズ・フォーラムの一員として、この連立勢力内部、または他勢力との間にどんな不一致もないよう願つてゐる。

が、現在に至るまで、どうもこの連立勢力がどういう政治過程を展望しているのか、つかみにくい。国民的課題に、この連立が有効なら、我としては、レバノン開拓や来る転換点にある我々の現状を克服しろるものとして、双手をあげて支持するだろう。

6. C C U L (統一レバノンのためのクリスチャン同盟)に対する態度

我々は、短期、長期のクリスチャンの統一を呼びかける事を支持する。だから、C C U L のメンバーと党は会つたりもした。もし C C U L が統一の大義に有効なら、我々はこれを鼓舞するだろう。レバニーズ・フォーシーズの一員として、この連立勢力としているのか、つかみにくい。国民的課題に、この連立が有効なら、我としては、レバノン開拓やく来る転換点にある我々の現状を克服するものとして、双手をあげて支持するだろう。

力を合わせて問題を解決していくような基本的合意がどこまで作られるのかという事と、我が党が展望する将来のレバノン建設において我が

の特異な構造を救うのは、大統領を支持するという事による。独自の政治的決定というテーマは、世論を左右するスローガン以上のものではありえても、目標たりえない。

党が積極的な役割を果たしていけるようない道、この二つを現在模索している。とまかく、CCULにどう応えるのかの方針は未だ決定されていない。政治活動にとって積極的な出発点がでたとは考えているが。CCULが実動を開始し、政治路線を決定してから、我が党政治局は最終的態度を出したないと考えている。CCUL形成はエリ・ホベイカ、サミール・ジャジヤがビキルキで行った決断に沿つたものだ。う噂もあるが、本当かどうか知らない。CCULに参加しているのはレバノン政局の管区御座所、ファランジストの都市ジュニエ西方の会談かもしれない。

7. レバノンの将来——オーストリア式中立国ではなく、アラブの一員として

正直のところ、全員が平和的にくらせる平和なレバノン建国を、我が党はめざしている。オーストリア式中立国建国を唱える人々もいるが、条件はどうあるだろうか？ オーストリアの場合、東西ヨーロッパのま

あるところ）とビキルキ（マロン派の管区御座所、ファランジストの都

市ジュニエ西方）の会談かもしれない。

8. 対シリア政策

a、ファランジ党とシリアの関係

現在、両者の関係は肯定的であり、友好を基盤にしている。我が党は次

の二つの根拠により、この関係維持

を望むものだ。

(i) レバノンにおけるシリアの役割

今年の三月、我が党代表団がシリ

アを公式訪問し、七〇年代初頭、ピ

エール・ジャマイエル党首時代に匹

敵するような我が党—シリアの強固

な関係を作った。

シリアはレバノンを危機から救出

し、レバノンの全グループが其存の

ふん興気の中で存在しうるよう保

証しようとしている。この事は、ま

ちがいない。レバノンにおいてはど

うするか、まだわからない。我が

党に対しても、どこからもこの旨の

提案はない。だから、党レベル、ま

たは他の方面でも、この問題は討議

されていない。個人的見解では、現

状ではありえないだろうと思う。

9. キャンプ攻防戦が象徴している

レバノンにおけるパレスチナ問題

a、一九七〇年代のレバノンにおけるパレスチナ武装力の問題

基本的にことは、レバノン国家は

主権の及ばない領域をもつ事を拒否

するということ。つまり、国家にと

っては、国家の中の国家という存在

と共にすることはできないというこ

とだ。レバノン人にとって許される

事が他の人々にはそうではないとい

う。

この問題については、大統領、首

相、閣僚が一致団結して政策を決め、

国際的調停を要請すべき。

d、カイロ協定は、今どうなって

いるのか？

八二年後、カイロ協定は自動的に

破棄された。実質的に破棄されたと

みなす。従って、協定を云々するの

は不必要。現在、協定を実施する、

いすれ討議・決定していくべきであ

る。

アマルは武装解除を要求している

が、これは不可避であり、今度こそ

長びく分、レバノン国内への反響が

大きくなっていく。

b、現在のキャンプ攻防戦

アマルが一気に軍事的勝利を握る

と考えていたが、実際はなかなかむ

ずかしいようだ。これで、長びけば

レバノン人集団が存在する事は、理

由にならないし、うけ入れ難い。

10. アマル、PSP、スレイマン・フランジエとの関係

こうした党派とは、レバノン危機の解決案を作つていて努力にむけ、対話をを行う事を奨励している。そう

こうした全党派との関係改善に力を入れるようにしたい。

レバノン戦争の被害者

軍だ（全訳）

マンデー・モーニング

八五年六月一〇日—一六日

イスラエル軍は、今月六日をもつてレバノンからの撤退を完了しようとしている。これから先何年かかる

安の中です。何千人という徴兵（訳注：イスラエルは国民皆兵）が通路脇に爆弾がないか、ゲリラの奇襲がないか、決死隊攻撃がないかと三年間まことに監視、監視に明けくれた。國

の党派も、別の党派を制圧してはならないというのが我が党の信条である。他の党派もこの点で見解を一

部として、アラブ界の一員として存

在していかねばならない。我が党

の外交政策の原則的立場は、過去、

現在も、ここにある。現在、この外

交路線が可能か否かを決定すべく、

保安面での検討を行つて。それが終了したら、レバノンの将来のコ

ースを最終的に決めていきたい。

7. レバノンの将来——オーストリア

ア式中立国ではなく、アラブの一員として

正直のところ、全員が平和的に

くらせる平和なレバノン建国を、我が

党はめざしている。オーストリア式中立国建国を唱える人々もいるが、

条件はどうあるだろうか？ オース

トリアの場合、東西ヨーロッパのま

あるところ）とビキルキ（マロン派の管区御座所、ファランジストの都

市ジュニエ西方）の会談かもしれない。

8. 対シリア政策

a、ファランジ党とシリアの関係

現在、両者の関係は肯定的であり、

友好を基盤にしている。我が党は次

の二つの根拠により、この関係維持

を望むものだ。

(i) レバノンにおけるシリアの役割

今年の三月、我が党代表団がシリ

アを公式訪問し、七〇年代初頭、ピ

エール・ジャマイエル党首時代に匹

敵するような我が党—シリアの強固

な関係を作った。

シリアはレバノンを危機から救出

し、レバノンの全グループが其存の

ふん興気の中で存在しうるよう保

証しようとしている。この事は、ま

ちがいない。レバノンにおいてはど

うするか、まだわからない。我が

党に対しても、どこからもこの旨の

提案はない。だから、党レベル、ま

たは他の方面でも、この問題は討議

されていない。個人的見解では、現

状ではありえないだろうと思う。

9. キャンプ攻防戦が象徴している

レバノンにおけるパレスチナ問題

a、一九七〇年代のレバノンにおけるパレスチナ武装力の問題

基本的にことは、レバノン国家は

主権の及ばない領域をもつ事を拒否

するということ。つまり、国家にと

っては、国家の中の国家という存在

と共にすることはできないというこ

とだ。レバノン人にとって許される

事が他の人々にはそうではないとい

う。

この問題については、大統領、首

相、閣僚が一致団結して政策を決め、

国際的調停を要請すべき。

d、カイロ協定は、今どうなって

いるのか？

八二年後、カイロ協定は自動的に

破棄された。実質的に破棄されたと

みなす。従つて、協定を云々するの

は不必要。現在、協定を実施する、

いすれ討議・決定していくべきであ

る。

アマルは武装解除を要求している

が、これは不可避であり、今度こそ

長びく分、レバノン国内への反響が

大きくなっていく。

b、現在のキャンプ攻防戦

アマルが一気に軍事的勝利を握る

と考えていたが、実際はなかなかむ

ずかしいようだ。これで、長びけば

レバノン人集団が存在する事は、理

由にならないし、うけ入れ難い。

10. アマル、PSP、スレイマン・フランジエとの関係

こうした党派とは、レバノン危機の解決案を作つていて努力にむけ、

対話をを行う事を奨励している。そ

うこうした全党派との関係改善に力を

入れるようにしたい。

レバノン戦争の被害者

軍だ（全訳）

マンデー・モーニング

八五年六月一〇日—一六日

イスラエル軍は、今月六日をもつて

レバノンからの撤退を完了しよう

としている。これから先何年かかる

安の中です。何千人という徴兵（訳注：

イスラエルは国民皆兵）が通路脇に

爆弾がないか、ゲリラの奇襲がないか、決死隊攻撃がないかと三年間ま

るごと監視、監視に明けくれた。國

の党派も、別の党派を制圧してはな

らないというのが我が党の信条であ

る。他の党派もこの点で見解を一

致つて、アラブ界の一員として存

在していかねばならない。我が党

の外交政策の原則的立場は、過去、

現在も、ここにある。現在、この外

交路線が可能か否かを決定すべく、

保安面での検討を行つて。それが終

了したら、レバノンの将来のコ

ースを最終的に決めていきたい。

CCLU形成はエリ・ホベイカ、サミール・ジャジヤがビキルキで行

った決断に沿つたものだ。う噂もあるが、本当かどうか知らない。C

CLUに参加しているのはレバノン

政治に長いこと活躍してきた方々が

多いし、CCLU結成の発端はバア

ブダ（訳注：レバノン大統領官邸の

あるところ）とビキルキ（マロン派の管区御座所、ファランジストの都

市ジュニエ西方）の会談かもしれない。

7. レバノンの将来——オーストリア

ア式中立国ではなく、アラブの一員として

正直のところ、全員が平和的に

くらせる平和なレバノン建国を、我が

党はめざしている。オーストリア式中立国建国を唱える人々もいるが、

条件はどうあるだろうか？ オース

トリアの場合、東西ヨーロッパのま

あるところ）とビキルキ（マロン派の管区御座所、ファランジストの都

市ジュニエ西方）の会談かもしれない。

8. 対シリア政策

a、ファランジ党とシリアの関係

現在、両者の関係は肯定的であり、

友好を基盤にしている。我が党は次

の二つの根拠により、この関係維持

を望むものだ。

(i) レバノンにおけるシリアの役割

今年の三月、我が党代表団がシリ

アを公式訪問し、七〇年代初頭、ピ

エール・ジャマイエル党首時代に匹

敵するような我が党—シリアの強固

な関係を作つた。

シリアはレバノンを危機から救出

し、レバノンの全グループが其存の

ふん興気の中で存在しうるよう保

証しようとしている。この事は、ま

ちがいない。レバノンにおいてはど

うするか、まだわからない。我が

党に対しても、どこからもこの旨の

提案はない。だから、党レベル、ま

たは他の方面でも、この問題は討議

されていない。個人的見解では、現

五・三 レバノン人キリスト教徒らの。五・二 四月に三四〇人が死亡（うちサイダで一二六人、イクリムループで五〇人）。うち三四人はイスラエル、残りは民兵によるもスは、チュニスで P.L.O.と接触する予定だったが、英政府は四月二九日接触を凍結。P.L.O.はこの英國決定を非難。

ノルマニード

(一九八五年五月一日
(六月一〇日)

パレスチナ人は、我々の兄弟であり、彼らの闘いは、即ち我々自身の闘いだ。我々はシリアと共に歩調をとるパレスチナ指導部は、同盟者であるとみなしている。この意味で、

五・六 戦闘、最大規模にエスカレート。
◇アサド・シリア大統領、アミン・レバノン大統領電話で協議、「レバノン軍団（LF）」司令官ジャリビア、ECとの共同協定締結についての希望を表明（マグレブ諸

キリスト教民兵、グリーン・ライ
ン沿いの武装を強化し、東西ベイ
ルートの唯一の通路である博物館
前クロッシングも銃撃戦とスナイ
ピング（狙撃）の激化のため閉鎖。
ついで四日にはグリーン・ライ
ン沿いで戦闘開始。

支援せず、代わりにS.E.A.指揮者ジョンガウングに新しい軍指揮部に加わるよう呼びかけている」と発言。

◇リビアのシャルード前人民会議書記長インタビューで、「われわれはリビアとスレーダンのユニティーを得し、エジプト、リビア、スレーダンの三国人民の統一をめざした。だがスレーダン前大統領ヌメイリとエジプト前大統領アサドのために成功しなかつた。リビアはスレーダン人民解放軍（SPLA）を支援せず、代つてSPLA指導者

五十九 I.E.司令官シ・シは乍れてホベイカがL.F.代表に。△爆弾で一命をとりとめ、アメリカで治療を受けていたサイダ地区指導者ムスタファ・サード氏帰国。△イスラエル国防相ラビン、「イスラエルの元老院議長」。

◇レバノン保安委員会が閉鎖の続く博物館クロッシングを開けようとして攻撃を受ける。六日には三五人死亡、一四〇人以上負傷。七日軍はグリーン・ラインから重火器を撤収することに合意した後、緊張緩和。

1985年9月30日 第1号 月刊 由東レポート

あの侵略戦中、イスラエルのジエット戦闘機は、レバノン東部に配備されていたシリアの地対空ミサイルを破壊した。しかし、軍事専門家の話をでは、イスラエル空軍の対シリアミサイル攻撃は、時をまちがえたかもしれない、とのことだ。つまり「シリアのミサイルに対するイスラエルの極秘戦略上の対応は、無意味な戦闘によって（敵に手の内を見せる）暴露されることになり、おかげでシリアは戦争前より三倍の兵力をレバノンにつきこむことになった」こう論評するのは、エールサレムポスト紙の軍事特派員ヒルシェ・ダッドマンである。

イスラエルは、レバノン侵略戦争ベイルート包囲戦、シーア派の村々に対する賛否両論の「徹底弾圧」政策によって、イスラエル軍がずい分弱体化したのではないかという恐れもあるが、イスラエル兵士たちに貴

今後イスラエルがどんな紛争をおこそうと、それはシリアとの対峙ということになる。八二年のレバノン侵略では、イスラエル軍はシリア軍をしたたかたいたのだが、以来ソ連の援助をうけ、シリアの軍備は八年をはるかに上回るものになつているという。

重な戦闘体験を積んだのも事実である。しかし、イスラエル兵士共は敗北感にさいなまれ、イスラエル国家あげてではなく、道義性があれこれとりざたされているような戦争に己の命をかけることへのやりきれなさから、すっかり意気阻喪したのである。

P S P 常任委員マルワン・
ハマダ氏語る

ルウバ解放・シドン解放戦では甘
闘したが、今回はしなかった。P.S.
Pは、パレスチナ・キャンプをめぐる
戦闘は、アマル、P.S.P.、そしてキ
リスト・シリアをも内ゲバにひきすりこ
もうとするあるアラブ勢力の挑発とし
て考へている。我々の立場は、以下で
ある。

* 1 イエディオス・アハロノト
テルアビブ、一九三九年創刊、
又刊、ローマ、一八四〇年。

マンデーモーニング
八五年六月一〇日(一)六日

a、アラブ・レベルでは、アラファトの逸脱路線に反対
正当な中東和平実現については、

* 2 ダヴァーアール
テルアビブ、一九二五年創刊、
ヒスタードール機関誌、日刊、五
万部。

エルサレム、一九三二年創刊、
朝刊、中立系、英語、四万七〇
万部。

（以上中東北アフリカ年鑑八一八
二年版から）

1 シリア調停の停戦案について
現在、不一致点は統一の方向へ向けて、組織されつつあるだろう。何よりも重要な事は、反イスラエル勢力どうしの対立をおさめる事。何なら、イスラエルはまだ居すわっているし、イスラエルのために動いているラハドと手下が南部の一部を手離しているから。これを叩き出す事に力を注ぐべきなのだ。

暗殺された我々のリーダー、カフ・ジヨン・ラツィ、彼の目撃者たる私たちは、

対イスラエル戦略バランス作りを主張するシリアのやり方が必要十分条件と考えている。つまり、イスラエルは、決しておとなしく我々に譲歩もしないし、略奪した権利放棄もない相手だから、対抗する力量を形成しなければならないのだ。この意味で PSP とシリアは、いかなる情勢の流動があろうと、戦略同盟を堅持していく。

b、レバノンの進歩、民主勢力間

たのは、レバノンをアラブ国家にするという事で、反イスラエル性を明らかにすることだった。今、我々はこの目標に肉迫している。

の同盟堅持 ファランジスト勢力の敗北、マルチ軍撤退、レバニーズ・フォーシズのヘゲモニー破壊、これらをやりとげられたのは、上述の同盟関係、力を一つにしたからである。今後も、これを堅持する。

た」と発言。

五・二〇 イスラエル、政治犯釈放。
イスラエル捕虜三人とパレスチナ関係者一一五五人の相互釈放（うち約七〇〇人は占領下のヨルダン川西岸、約六〇〇人はイスラエルとゴラン高原に）。この釈放は八二年以来のもので、日本政府は岡本同志の釈放に対しイスラエルに抗議。

◇シーザ派とパレスチナ人の対立で一人死亡。

◇イスラエルで増税。

◇アラファト議長とヨルダン首相オベイダト三時間にわたって会談。

パレスチナ・ヨルダン合同代表団問題が焦点。

◇一六カ月前に誘拐されたサウジ外交官釈放。

◇イスラエル外相シャミール、二五人のユダヤ人テロリストの釈放をペレスに要求。

五・二一 イスラエル、捕虜解放を視う占領下のパレスチナ人四二人を逮捕。

五・二二 東ベイルートで爆弾三〇六〇人が死亡。パレスチナ勢力はベイルートを見下ろすドルーズ地区からシーザ派民兵組織アマル

◇被占領地で釈放された六〇〇人のうち二人が報復の懸念からヨルダンへ避難。

五・二四 アマル対パレスチナ勢力の戦闘で死者二〇〇人、パレスチナ側は決死隊を組織、「キヤンブ」を死守せよ」とアピール。南部のキャンプでも包囲戦。

◇被占領地で解放された一人が煽動罪で再逮捕。ラマラではPFLPの地下陣型発覚、三〇人検挙。

◇日本外務省、イスラエル駐在閏大使を通じ「一件落着」をイスラエルに通告。

五・二五 イスラエル機、ベイルート、ベカーア上空を偵察飛行、サブラ、シヤティーラの抵抗弱まる。

◇レバノン軍指導部会談、第六旅團への火炎放射器を含む装備強化を決定。

五・二六 アラファート議長、「ソ連がパレスチナ人の抹殺を許さないという保証をしている」と発表。

◇フェイン・ムバラク会談。

五・二三 フセイン・サッチャーニ談。

◇フェイン・ムバラク会談。

◇（イスラエル放送では）六日間のキャンプ攻防戦で死者三六八人、負傷一七〇〇人（ただし赤十字がキャンプにはいないので、死者はもつと多いはずといわれている）

◇アサド大統領訪ソ。ソ連側からの緊急の「訪問要請」によるものといわれている。

五・二八 ベイルートでベイルート病院長誘拐。

五・二九 フセイン訪米。フセイン・レーガン会談。

◇パレスチナ民族救済戦線（P.N.S.F.）のパレスチナ人少女四人（一七歳一九歳）アマルとレバノン政府軍第六旅団に対し爆弾攻撃（爆弾を抱えてサabra・キャンプを包囲した「敵」陣に突入）。

◇レバノン中、西部国境からイスラエル軍撤退完了。東部では依然残留。

五・三〇 PFLPハッシュ議長、アルジエで声明発表、シリアがアマルの猛攻を容認しているとしてダマスカスへ。

公然と批判。

五、三一 キャンプ攻防戦で一時アマルの仲裁による停戦が合意されたが、三時間後さらに激しい戦闘再開。二週間近く続いた戦闘による死者は四二七人、負傷者二〇〇〇人、死傷者の大半はパレスチナ人。アミン大統領、アサド大統領に介入を要請。

◇ヨルダンでクーデター発覚。バース党ヨルダン支部によるものとされる。フェインは予定を切り上げて訪問先のアメリカから帰国したが、ヨルダン当局はこの「切り上げ帰国」説を否定。「健康診断でロンドンへ行くため」と言明。

◇シユルツ記者会見、「中東和平のためのソ連を含めた国際会議の開催」というフェイン提案に反対するとの意向を表明。

◇アミン大統領、シリアとの会談を継続。

六・一 ヨルダン外相マスリ、六月中にアメリカとヨルダン・パレスチナ合同代表との予備折衝を行うと言明。

◇イスラエルのリクード(右翼連合)対ヨルダン最新兵器売却政策以外はアメリカのヨルダン政策を支持するとの意向を表明。

二〇〇人)、三六・六%がアラフ
アト議長との対話を期待(一〇年
前は一〇・六%)、三七%がパレ
スチナ人を中東和平交渉に参加さ
せることを支持(一〇年前は一五
・四%)。

五・一・一 アラファト・鄧小平会談。
中国側は「まず長期戦には団結、
パレスチナと他のアラブの違いを
克服し、共通の立場を見出すべき
である」と発言。

五・一・二 アラファト議長、記者会
見で「彼ら(アメリカを指す)が
動く番である」と主張。
△レバノンの進歩社会主義者党(P
S P)ジョンブラット党首、記者
会見で、「LFとの対話はあり得
ない」と発言。

◇ペレス・シュルツ会談で、「P
L

◇ グループを訓練したという米ワシントン・ポスト紙の報道を否定。

◇ シュルツ、「イスラエル、アラブ交渉の実質的展開を図るため、五月中旬にフセイン・レーガン会談を行う」と発表。

◇ レバノン政府、グリーン・ライン東側の裁判所が攻撃されたあと、「裁判記録をすべて失った」との声明発表。

五・一四 シュルツ・グロムイコ会談。

五・一五 シュルツ、「首脳会談は合意に達していない。ただ会談は承認しなければ議会を解散する」と発言。

◇ベリ、ラフィクハリリ、ジョンブ
ラット、シシュル・サミー（ア
ミン大統領アドバイザー）のレバ
ノン各派指導者四人は、三日間に
わたってシリアのハダーム副大統
領と会談、一六日にレバノンに帰
国。シリア側は軍事介入のための
二つの条件を提起。

五・一七 戦闘激化、レバノン指導
者はシリアの介入を要請。

◇ドルーズ派のPSP事務所から約
五〇メートルのところで車爆弾が
爆破。三月八日にシーア派のマホ
メッド・フェイイン、ファドラーの
住居近くで車爆弾が爆破、八〇人
が死亡、二六〇人が負傷した時以
来の最大規模。

◇エジプト大統領ムバラク、トルコ訪問、経済協力について合意。

◇L.F.、ジェジーン地区からの撤収と、イスラエルにあるリエゾンオフィス（連絡事務所）の閉鎖を決定。

五・一九 カダフィイ大佐、連続二日間にわたりファハド・サウジ国王と会談。イスラエルが核兵器のスイッチをアメリカから非合法に輸入していたことが発覚。

◇フセイン、二〇日にエジプトを訪問すると発表。サウド・サウジ外相「イラノンは日本二年三月に表つられ

◇ アラファート P L O 議長、六人から地入口での自動車爆弾攻撃で南部レバノン軍（S L A）メンバー死亡。テエルはキリスト教徒を助けるため軍事介入はしない」と意向表明。

五・一三 アブ・イヤド氏（PLOのトップ・リーダーの一人）、チニスで「PNC決議に反したPLOの動きは誤りであり、ヨルダントとの連邦制はパレスチナ国家が建設されてからあとどの問題であると主張。

◇イスラエル、エジプト会談。両者とも合意見通し、エジプトでは合意反対のデモ。
ヨルダン川西岸占領地区でアイルランド人の国連職員誘拐。
レバノンの戦闘続く。フランジーはシリアの軍事介入を要請。元大統領シャムーンもシリアの協力を呼びかけ。

◇ヒズボラヒ指導者ファドラー師、あいつぐ誘拐を非難。直後国連職員が釈放された。「相手は私は対してアメリカ人かイギリス人かと国籍をたずねた。UNRWAの人間だと答えた。アイルランドという国を知らず、私を必要としない様子だった」

- ◇ キャンプ攻防戦、アサド大統領の仲裁によりアマル指導者ナビ・ベリが休戦を指令。
ラジネ両キャンプにはいり、九三人の負傷者を救出。
- ◇ 赤十字、シャティーラ、ブルジバ、ラジネ両キャンプにはいり、九三人の負傷者を救出。
- 六・二 レバノン軍の声明によると、ベカ一高原ラヤク空軍基地（現在未使用中）司令官暗殺される。
- ◇ イラン外相顧問、サウジアラビア訪問。
- ◇ サウジ副首相兼国防軍司令官アブダラ・皇太子、クウェート・アル・カバス紙とのインタビューで「湾岸協力会議（G.C.C.）の保安強化を生命線とすべきである。ラマダン中にベイルートの戦闘を停止させよう」と意向表明。
- ◇ イスラエル外相シヤミール、ヨーロッパ歴訪。
- ◇ シュルツ、フセインとの会談内容を書簡でイスラエル首相ペレスに報告。
- 六・三 イスラエル国防相ラビン、「レバノンからの撤退を若干遅らせるかも知れない」と発言。
- ◇ ベイルート滞在者やベイルート放送の報道によるシャティーラとブルジバラジネ両キャンプから数時間にわたってロケット砲撃（休

- 戦が破られているとの報告）。
◇ ヨルダン外相マスリ、ワシントンで「米政府とヨルダン・パレスチナ合同代表団の折衝が恐らく二週間以内にアンマンで始まる」と発表。
- 六・四 グリーン・ライン五週間ぶりに再開。だが三〇分後に両サイドからの銃撃が始まり再び閉鎖。
- 六・五 アミン大統領、安保理常任理事国大使に①国連軍をレバノンに被占領地の国境に配備するといふ国連決議四二五を実行している、②イスラエルおよびSLAの完全撤退を勝ちとろうとしている、③緊張が高まつた分だけ各派の共存が困難になつた——とレバノンの立場と現状を説明。
- 六・七 SLA、UNIFILのフイナンド兵二六人を逮捕、アルが捕えたSLA二六人との交換を要求。

- 六・八 ペリは①イスラエルはアンサール刑務所のアマル戦士を釈放する、②SLAはジャジンから撤退する——と回答。
- ◇ アラブ連盟緊急評議会チュニスで開催、シリアは外相が代表で出席、レバノン代表は欠席。レバノン問題に対する決議提案でレバノンの主権問題が焦点となり、レバノンの愛國勢力への攻撃があつたため、シリアは修正対案を提出。
- 六・九 ラビン訪米を終る帰国。五時間にわたり内ゲバ（アマル保安筋によるとアマル側がP.S.P.民兵を乗せた車を検問しようとして衝突。アマル側はP.S.P.のオフィスを制圧したというが、P.S.P.側はこれを否定）。

- ◇ ペレス五項目提案表明——①イスラエル、ヨルダン、エジプト、パレスチナ人（P.L.O.メンバーを含む）がアメリカとの会談を続ける、②米参加の「平和会議」議題づくりに向けてイスラエル・チュニス・ヨルダン・パレスチナ合同会議を設置、③ヨルダン・パレスチナ・イスラエルの直接交渉を国連安保理常任理事国が支持する、④ペレスチナ代表は「住民の立場を代表し、イスラエル、ヨルダンにとって受け入れられる人物」で、あり、現在被占領地に存在するペレスチナ人を任命する、⑤三ヶ月以内に和平会議のオープニング会議をアメリカ、ヨーロッパまたは中東で開催、これについては後日さらに具体化させる——というも
- ◇ 北ガリラヤにロケット砲（二発）攻撃。レバノン・レジスタンスと闘争戦線（サミール・ゴーシュ）が声明発表。
- ◇ ペレス、三ヵ月後のイスラエル・ヨーロッパ和平会議開催に向けて双方で議題検討委員会を設置しようと提案（クヒヤ党など右派勢力は一二日、ペレス不信任提案を要求）。
- ◇ モロッコ国王ハッサン、緊急アラブ・サミット（首脳会議）を招請。トリポリでシャバーン師のイスラム統一運動とスンニ派「アラブの騎士」の内ゲバ発生。